

生きるための水

今年八十歳になる私の母方の祖父は、山あいの隣町に住んでいる。私が小学校四年生の頃まで、毎月二リットル入りのペットボトルをたくさん持って、険しい山道を登り、水をくみに行っていた。

そこはたくさんのおいしい木々がおいしげ、山のずつと奥で、木が影になって、一面に落ち葉の広がる地面は、いつも湿っていた。静かで、ひんやりとしていて、時々冷たい露が落ちてくる。

水は、石と石の間から、季節や天候にかかわらず、常に一定の量、細く流れ落ちていて、祖父はその水を取っていた。

家には、水道も井戸も、近くには川もあるのになぜだろう。幼かった私は、そんな単純な疑問をずっと聞いていた。

冷たい山水はとてもおいしく、祖父はみんな

天理市立福住中学校 三年

今西 春奈

なにそのおいしい山水を飲ませてあげたいという思いで、毎月毎月山を登っていたのだ。

その山水は、水質検査で、飲み水としては優秀な結果が出ていて、大腸菌等の雑菌もないという。だから、地元の老人ホームでは薬を飲むための水として現在も使われているらしい。

そんな、おいしく安全な山の水を取りに行っていた祖父も、年をとって、だんだん足腰が弱くなり、険しい山道を登るのは危険になっていった。心配した母は、祖父の家の蛇口に浄水器をつけてあげた。

「これで、大変な水取りに行かなくても、おいしい安全な水が飲める。」

と祖父は大喜びした。安全でしかもおいしい水にこし

たことはない。水は、飲み水だけでなく、人間の生活全般に必要不可欠な限りある資源だ。「水は人の命を、直接的にも間接的にも支えている資源だ。」ある有名なジャーナリストが言っていた。その通りだと思う。でももし、濁った不純物だらけの水しかなかったら。人は、濁った水を使わざるを得ないだろう。

世界には、安全な飲み水が利用できない人が、約九億人もいるという。特に、発展途上の国のアフリカや、南アジアなどの国々では、少しでも安全な水を求め、往復で二時間以上も歩いて水をくみに行っているとテレビで見た。その毎日の水くみは女性や子どもたちの仕事で、片道一時間以上も歩き、帰りはくんだ水を持ってまた、一時間以上歩く。とても大変な仕事だ。もちろん子どもたちは学校に行く時間もない。

そんな大変な思いをしても、人々は毎日水くみに行く。濁っていてきれいな水でなくても、生きるにはそれしか方法がないのだ。しかし、改善に向けて取り組んでいる人たちもいる。村の近くに井戸を掘ったり、水道

管を通したり。そんなことをしている日本人もいるとテレビで知った。井戸をつくってもらった人たちの顔は、笑顔があふれていた。井戸をつくった人も、水がとなりにあると安心させてあげたいという思いが実現できて喜んでいたら。少しずつだが、取り組みが続けていけば、水くみに行っていた子どもたちが、学校に行けるかもしれない。

祖父や井戸をつくってあげた人、自分のことだけでなく、誰かのためを考えている。私たちが誰かのことを考えているだろうか。考えていけば、水の無駄遣いや川へのポイ捨てはなくせると思う。

石と石の間から出てくる山水も、蛇口から出てくる水も、私たちが未来につなげていかなければいけない大切な水である。人間が生きていくのに必要な水である。誰かが誰かのことを考えて、未来：今を考えて、水を大切に使う。これから続ける。